

地域鉄道の高付加価値フォーラム in 五所川原

どっすー？ 地域鉄道



2023年12月16日(土)

13時30分～15時45分 13時開場

会場:五所川原市民学習情報センター
五所川原市字一ツ谷503番地5

参加費:無料

参加申込み:ホームページから(<https://ecotran.or.jp/>)

電話での申込み:津軽鉄道総務課 0173-34-2148



ホームページ

プログラム

開会のあいさつ 一般社団法人交通環境整備ネットワーク
代表理事 原 潔

基調講演「地域交通法改正のポイント、地域の鉄道はどうあるべきか」
国土交通省大臣官房参事官 田口芳郎氏

トークセッション「地域鉄道の付加価値を高めるには」

コーディネーター / 東京女子大学現代教養学部教授 矢ヶ崎紀子氏
パネラー / 国土交通省大臣官房参事官 田口芳郎氏
温泉ビューティ研究家・旅行作家 石井宏子氏
津軽鉄道株式会社顧問 澁谷房子氏

閉会のあいさつ 津軽鉄道株式会社代表取締役社長 澤田長二郎氏



田口芳郎氏
国土交通省参事官



矢ヶ崎紀子氏
東京女子大学教授



石井宏子氏
温泉ビューティ研究家



澁谷房子氏
津軽鉄道 顧問



ご 案 内

2023年12月16日(土)五所川原市民学習情報センターにおいて「地域鉄道の高付加価値フォーラム」を開催いたします。このフォーラムは、日本における地域鉄道の役割や存在意義をひもとき、運輸の手段のみならず地域をけん引する存在として、地域の風景を彩る観光資源、コミュニティの場、地域の文化など多角的に考察して論じ、これからの地域を支えていくための「地域鉄道の価値」をより高めていく機会にしたいと考えております。

国は地域交通法を改正し、2023年を「地域公共交通再構築元年」として公共交通機関への支援を強化しています。そこで、この施策の筋道を作られた国土交通省大臣官房参事官の田口芳郎氏と地域交通と観光振興に携わる有識者にお集まりいただき、地域鉄道の現状から如何に付加価値を高めることができるかを論じていただきます。

プロフィール (敬称略)

基調講演 / トークセッション

田口芳郎 Taguchi Yoshiro



国土交通省大臣官房参事官

1995年運輸省(現国土交通省)入省(鉄道局)。米国留学(ハーバード大学行政大学院)、海上保安庁、総合政策局、鹿児島県企画部交通政策課長、航空局、大臣官房、在米日本国大使館参事官、内閣総理大臣官邸国際広報室内閣参事官、観光庁参事官(外客受入)、国土交通大臣秘書官、鉄道局鉄道事業課長を歴任。鉄道事業課長として「鉄道事業者と地域の協働による地域モビリティの刷新に関する検討会」を設置、2022年7月に『地域の将来と利用者の視点に立ったローカル鉄道の在り方に関する提言』をとりまとめ、この提言を受けての地域交通法の改正に関わる。2023年7月から現職。乗り物全般、とりわけ鉄道には、ことのほか造詣が深い。

トークセッション

矢ヶ崎紀子 Yagasaki Noriko



東京女子大学副学長・現代教養学部国際社会学科教授

2008年から2011年まで観光庁参事官(観光経済担当)、2012年には国土交通省地域鉄道の再生・活性化等研究会の座長を務める。

住友銀行、日本総合研究所、首都大学東京特任准教授、東洋大学教授を経て2019年より現職。国土交通省交通政策審議会観光分科会会長、同・陸上分科会鉄道部会委員、国土審議会北海道開発分科会特別委員を初め、数多くの審議会等委員に就任。

東武鉄道及びJR貨物の社外取締役、NEXCO東日本の社外監査役を務める。

著書に『インバウンド観光入門』(2017年晃洋書房)ほか。

石井宏子 Ishi Hiroko



温泉ビューティ研究家・トラベルジャーナリスト

日本・世界の温泉や大自然を旅して写真撮影・執筆を行う。

温泉・自然・食で美しくなる旅には専ら鉄道を利用。観光鉄道のアドバイザーも務める。

2012年には国土交通省地域鉄道の再生・活性化等研究会の委員を務める。

杏林大学観光交流文化学科兼任講師(温泉療養学)、日本温泉気候物理医学会会員、日本温泉科学会会員、日本旅のペンクラブ会員、気候療法士(ドイツ)、温泉入浴指導員。

著書に『感動の温泉宿100』(2018年文春新書)『新・温泉ビューティ』(2023年グリーンキャット)ほか。

澁谷房子 Shibutani Fusako



津軽鉄道株式会社 顧問

1977年津軽鉄道株式会社に入社。総務、経理、企画部門等を担当、管理・企画グループを統括する執行役員を経て、2017年より現職。

社長の右腕として「仮想乗車」などの企画、商品開発の他、津軽鉄道の魅力を広く発信し続ける。津軽鉄道津軽飯詰駅構内「種村直樹汽車旅文庫」開設に尽力。

沿線住民や津軽鉄道を愛するファンからは、親しみを込めて「津鉄のお母さん」と呼ばれている。